連載
建築と社会を考える
NO.48

私にとっての「建築と社会」

―木を見て、森を見る―

武庫川女子大学生活環境学部教授
三好庸隆

1972年大阪大学工学部建築工学科卒。同大学院修了。建築・都市設計専門事務所を経て、1988年PPI計画・設計研究所設立。同会長。2007年度より武庫川女子大学生活環境学科教授。現在、生活環境学部長、研究科長。博士（工学）。

■はじめに

「先生の研空分野は、都市環境デザイン学・ニュータウン学・建築計画学など多岐に渡りこの連載の趣旨に相応しいことから、執筆をお願いしたい」などとおだてていただき、由緒あるこのシリーズに加えていただくこととなった。

さて、建築と社会が関係することはある面自明であると思われるが、改めて建築と社会を考えたくなるのはどのようなときであろうか。建築の世界（例えば建築業界、学会や建築ジャーナルの世界）と社会課題（例えば経済、市民的価値観・美意識、貧困、居住などの課題）との間にズレが生じ接続していないと感じるとき“こんなことでいいのか”と建築と社会を考えたくなるのだろう。この連載においても多くの識者が論じておられるように、建築と社会との間には奥深い議論が横たわっていることを改めて認識するが、「詳細で精緻な地図ほど分かりにくい」と開き直り、私なりの構図を提示しつつ、「私にとっての建築と社会」を考えてみたい。

■「建築」と「社会」との関係とそれを論じる主体

建築とは何か、社会とは何か、については歴史的に多くの論考が積み重ねられ今日に至っている。それらの輪郭は自明とは言えない。そのようななかで２つの概念がどう関係するのだろうか。建築に関する多くの概念は社会という概念に包摂されると思われるが、例えば審美的な概念については必ずしもそうではないと考える人もいるかもしれない。いずれにしても建築が閉じられた枠組みの論理（？）を持ち、社会からズレていくときに建築と社会を考えたくなるのではないか、と先に述べた。ここで、建築と社会を考える人の目はどこにあるのだろうか。建築から社会を考えるのか、社会から建築を考えるのか。神の視座から考えるのか。主体はどこにあるのかは、重要であると思っている。振り返れば私はささやかながら以下のように考えてきた（いる）ように思う。あなたはどのようにお考えになってきたか。

■木を見て森を見ず

私が建築と社会に思いをはせるとき、アナロジー（メタファー）として脳裏に浮かぶのは「木を見て森を見ず」というフレーズである。一本の木やその細部の枝ぶりばかりに気をとられていると、森や山全体の良さや問題点が分からなくなるということである。各論、ディテールに囚われすぎて、事象の全体像を見失ってしまうことを意味している。これを建築と社会に当てはめてみると「木」が建築で、「森」が社会ということになろう。「建築と社会を考える」とは「建築（木）ばかりを見つめていて、社会（森）を見ず、ということになっていませんか」と問うことであり、「社会（森）に着目すれば、建築（木）についてもっと違う視点で考える必要が生じませんか」ということを問うていると考えてみたい。そのように考えて見ると身の周りには木と森を考える必要がある多くの論点がある。例えば「大学経営と教育の質」、「研究活動と教育活動」、「企業活動とSDGs」、「専門家と一般市民」、今日的には「コロナ禍対策と経済社会」。建築・都市計画・まちづくり分野にもう少し引き寄せると「デザイン（美）と機能（用）」、「個々の建築デザインと都市デザイン」、「イニシャルコストとランニングコスト」、「大都市と地方都市」等などであろうか。

■パーソナルヒストリー

ところで、先に「主体」について言及した。主体としての「私」が「建築と社会」をどう考えてきたかについて述べてみたい。1970年代半ば、私は建築工学系大学院を修了し、建築・都市計画・都市デザインの専門事務所で働くことになった。当時その事務所は恐らく日本で最も多くニュータウン（以下「NT」という。）を計画・設計しており、そこで建築系、都市工学系の諸先輩に鍛えていただいた。私はNTを計画・設計する部門で修行を積み重ねるとともに、並行して事務所外の「建築家」とも意図して交流を重ねたり、小住宅の設計を週末に行っていたりした。当時、多くの建築学生が都市と建築の中間領域である「アーバンデザイナー」という分野に憧れていたかと思うが、職能的にはそのような職種は確立していない中、私は客観的に見てそれに近い状況、即ち「建築デザイン」「アーバンデザイン（都市設計）」、「都市計画」の分野を横断する形で経

験を積むことができていたように思う。

本稿のテーマに即して言えば、「木」（建築）と「森」（都市、新市街地という社会）を考える機会が比較的多かった。そのような中で私は20台後半から30台前半にかけて、建築デザインの論理（「木」の論理）と都市計画・都市デザインの論理（「森」の論理）との間で、私なりに価値統合に悪戦苦闘していた記憶がある。アンビバレントな心理状況であったわけである。建築・都市・社会の創造（クリエイション）という面での相互の接続に自分なりにより明解な言葉を持ちたいことへのもがきであったと思う。

上記事務所は34歳で卒業させていただき、NT計画・設計の既存専門分野が都市生活に密着する暮らしの論理・市場の論理（商業などの企業活動、マーケット論理）に弱いことが大きな課題の一つと感じ、しばらくその分野の人たちと短期集中型で多くの仕事経験を積んだ。「木」と「森」を繋ぐ切り口のひとつとして必要と感じたからである。その後、38歳で独立。都市計画・建築設計事務所を設立した。独立後、幸運にもそのような私に仕事をさせようと思ってくれた公的機関・企業から仕事を受注し、多くのニュータウン計画・設計のチャンスが有った。並行して住宅（地）計画を中心に建築設計の機会もあり実績を重ねることができた。

ざっとそのような感じで、独立後30年が経つが、その間ニュータウン再生研究で学位を取得し、専任教員の声もかかり今日に至っている（後述）。「木」と「森」の間に自分なりに接続の言葉が持てたかは分からないが、「まあこんな感じかなと言った割り切り・諦観の中、実践経験がささやかな自信（居直り）の根拠となり、今に至っている」というのが正直な感想である。

総論はこの程度とし、以下にはこのようなパーソナルヒストリーを持つ「私が考えてきた、あるいは私が考えている建築（木）と社会（森）」について紙幅上５つの接続例を年代順に見ていただくこととする。

■「木」と「森」の接続への試み

●接続例１－豊中市・中高生のまちづくり講座

1980年代、私はこれからのまちづくり業務に住民や商業事業者などのステークホルダーの参加が欠かせないと感じてきていた。そして住民参加型まちづくりのさきがけのような動きをしだしていた[注1]。そのころ同業者でそのような動きをしていた人は少なかったように思う。ちょうどその時期豊中市に住民参加型まちづくりを重視している幹部がおられ、その方と連携を深める中、「まちを良くしていくには、次世代を育てていくことにも取り組むべきではないか。」との趣旨で表題の事業を提案した。その方のリアクションは素早く1990年代後半から表記講座を実現することができた。タウンウォッチングの後ワークショップを行い、市への提案事項をまとめるといった愉しく可愛らしい事業内容である。今でこそこのような取り組みはよく見かけるかと思われるが当時はほとんどなかった。そのようなことから後に2001年度第16回日本建築士会連合会賞（業績賞）優秀賞をいただいた。その講座を受けた生徒が、都市計画・まちづくりの分野の大学に進学した、などと言うことも耳にしている。

この試みは、私にとっては、都市計画・まちづくりを専門家の中で閉じた議論（「木」の議論）で終わらせるのではなく、社会（「森」の議論）との接続の中で考えていくべきである、と言う思いに基づいている。

豊中市・中高生のまちづくり講座の報告書（一部）

●接続例２－学位取得と大学専任教員

私の仕事は都市計画コンサルタント、などとも呼ばれる。都市再生機構や行政からの委託でまちづくり案を提案しまとめることになるが、単体の建築設計とはやや異なり、自分の考えたことは行政や事業者案の中に回収され、個人の提案として表に出ることはあまりない。事業組織として案を決定したのであるから、それはそれで筋が通っているのだが、提案者としての自分の考え・成果を世に問いにくい、と言うことが起こる。「木」である自分が社会である「森」との接続にストレスを感じていたわけである。そのような中、母校の恩師の一人から、「学位を取らないか」と勧められ、思い切って学位取得に数年をかけた。日々の業務に並行して論文を纏め、学会に問うということをしたわけである。「木」と「森」とのささやかな接続である。学位取得後すぐに現在勤務する大学から専任教員への声がかかった。2007年のことである。ここから教員という立場で、「木」と「森」を繋ぐことができる人材の育成に関与していくこととなる。

●接続例３－地域密着型芸術祭「のせでんアートライン」

郊外NT計画をテーマの一つとしていることから、大都市圏郊外エリアの人口減少状況とそれに伴う地域の衰退状況は大いなる関心事であった。そのような折、能勢電鉄（株）から開業100周年記念事業の企画を依頼される機会があった。能勢電鉄は、兵庫県川西市の川西能勢口駅から妙見山及び日生NTをはじめとする多くの郊外NTを結ぶ郊外地域鉄道である。私は、郊外NTのある地方自治体とそれを移動面で支える郊外地域鉄道は運命共同体であり、協力しあって人口減少社会を乗り切っていく必要があると考えていたため、能勢電鉄沿線地域をメインエリアとする地域密着型芸術祭「のせでんアートライン」を提案し、実施することができた。2013年度のことである。事業は目標の成果を収め100周年記念事業として終了する予定であったが、「のせでんアートライン実行委員会」として関係地方自治体（大阪府・能勢町・豊能町／兵庫県・川西市・猪名川町）が連携できるプラットフォームが形成されてきたことからこの地域密着型芸術祭を継続してはどうかという話になり、ビエンナーレ方式として継続されることとなった。

そして2015、2017、2019年度と続き2021年度も、第５回としてコロナ禍の様子を見つつ実施計画が動いている。私は、第１回の時は発案者・総合プロデューサーとして動き、その後体制はその都度手が加えられ、現在は実行委員長をしている。21年度は実施部隊として若い世代の、プロジェクトマネジャー、アートマネージャー、地域マネージャーが諸企画を動かしてくれており、事務局として能勢電が、そしてこれらをサポートする立場で、前記関係地方

自治体が実行委員会等に属している。また、過去のアートライン参加者の中には、持続的に地域活動に入りだしてくれる人が出てきたりしている。一方我々の動きとは別に地元で活動されている団体との良好なネットワークもできつつあり、地域の一体感も生じつつある。

この事例も私にとっては郊外NT群という「木」とそれによって形成されている郊外生活圏と言う「森」との接続への試みである。

「のせでんアートライン」のHPより

2021年のティーザーHPより

●接続例４－「武庫女ステーションキャンパス」プロジェクト

武庫川女子大学の最寄り駅は阪神電鉄　鳴尾・武庫川女子大前駅（2019年10月より「鳴尾駅」が「鳴尾・武庫川女子大前駅」と改名されている）である。その駅近傍が2018年に高架事業完了となり、高架下に空間が生じることとなる。駅改札出た正面には市の駐輪場（600台規模）が構想としてあった。そのような状況の時、2015年頃であるが、私は学院理事長から「高架下の改札出た正面あたりに、大学の地域貢献をテーマとしたイメージのいい施設をプロデュース（企画・設計）してほしい」という指示を受けた。具体的な内容例えば導入施設内容、規模、事業費など詳細は全く白紙であった。

私にとってこの仕事は単に高架下の建築設計（木）をするのではなくて、初期企画段階から学院理事会、土地所有者の阪神電鉄、高架下や高架周辺整備（側道、駅前公園、駐輪場など）を行っている西宮市との意見交換、説得、調整を行うとともに、導入テナントミックスの検討・リーシング、それらの運営管理などを総合的に纏めていくことが求められた。その成果として理事長からのミッションである地域貢献をどのように具体化し、建築デザイン、都市デザインとして統合し、表現していくかという仕事であった。「木」の検討を進めつつ、「森」の輪郭を明確にしていく、「森」の在り方を議論しつつ、「木」の在り方に反映させていくという作業である。構想段階から実施段階へと数年を経て、2019年秋に「武庫女ステーションキャンパス」（以下MSC）として、学院80周年記念行事のタイミングに合わせてオープンさせることができた。

MSCは３棟より構成している。メインのMSCとMSCアネックスⅠ，Ⅱである。改札口出た正面に位置しているメインのMSCはカフェレストラン、レクチャールーム、放送スタジオ、地方銀行の支店、小広場などで構成している。MSCアネックスⅠは、学内関係者の健康増進施設（スタジオ、ジムなど）で、運営ノウハウが確立した段階で地域の人たちにも開放が予定されている。アネックスⅡは地域への訪問看護ステーションや教室などで構成している。３棟で延床面積は約1500平方メートルの規模がある。関連して、市駐輪場整備、側道の整備、そして駅前公園の全面的リニューアルがあり、これらの設計方針についても多くの提案を実現させることができた。特に駅前公園については学園駅前を象徴する空間であることから、学生やま ちの人々がパーフォーマンスができるウッドデッキのステージを整備したり、時計台の下にアート作品が展示できる『みんなのちっちゃなアートボックス』と言ういわば世界一小さな美術館を企画・提案・運営している。

MSC竣工まで学院、阪神電鉄、西宮市とは長期にわたり検討体制が続いた。オープン後は、地域貢献・まちづくりをテーマとしたエリアマネジメントを持続的に検討し具体的に実践していく仕組みとして、検討体制を発展的に解消して「鳴尾エリアマネジメント連絡会」（武庫川学院事業部が事務局）を発足させた。その会には、MSCのテナントや、駅北側にその後オープンしたスーパーもメンバーに加えて、一緒に鳴尾地域の活性化を議論していくプラットフォームとしている。コロナ禍で活動が制限されがちであるなか、フリーペーパー「なるお通信」を既に二回発行（一回の発行部数は１万５千部）するとともに、並行して連絡会の事業内容をオーソライズするための会合や、鳴尾地域をよく知ることを目的とした懇親ツアーなどを実施し実績を重ねつつある。

これら一連の取り組みは、私としては、高架下施設を設計するという「木」の機会を通じて、大きな目的である地域貢献、駅前エリアの活性化・まちづくりという「森」の輪郭を明確にし、育てていくための持続的まちづくりへの仕掛けである。「木」の具体化の過程で、「森」のイメージに思いをはせつつ、両者を往復しつつ、「木」と「森」を徐々に育てているつもりである。

●接続例５－オールド・ニュータウン再生への提言

先のパーソナルヒストリーの項で少し触れたが、私は25歳から今日に至るまで50年弱ほぼ途切れることなく、何らかの形でNTに関与してきている。

2005年頃までは、NT計画・設計が多く、2000年前後には箕面市と茨木市の間にある“彩都”で多くの仕事をした。2005年頃以降はオールド化してきたNTの再生に関することが増えて今日に至っているように思う。

そう言えば日本の人口は2008年頃をピークに減少時代に突入している。1960年代から1980年代を中心に大都市圏への人口集中緩和策・ス

「武庫女ステーションキャンパス」の駅近くの様子

（撮影：松村芳治）

「武庫女ステーションキャンパス」を駅前公園からみる。手前にウッドデッキのステージが見える

（撮影：松村芳治）

プロール対策として大都市圏政策の中で位置付けられてきた多くのNTは、2000年代からオールド化したNTの再生がテーマとして取り上げられることが増えてきた。NTに長年関わってきた私としては、無視できないテーマである。

2006年には明舞団地再生コンペで『人と自然の循環都市　明舞』で最優秀賞を受賞し、2014年度には団地再編COMPETITION2013で河内長野市長賞を受賞するなどして、再生提案は評価を受けることができた。その後も兵庫県・明舞団地などで再生計画に携わりつつ、他のオールド化しているNTでのコミュニティ再生への試みに関心を払ってはいるが、私の見立てでは、2006年頃に検討していたNT状況とその後15年ほど経過しているNT状況とは本質的にはあまり異なっておらず、むしろ人口減少という大きな津波のもとに、都市構造の中でしっかりとした位置づけを持つ限られたNTを除いて多くのNTはますます厳しい状況に追い込まれているように思われる。

このような状況をどう考えればいいか。オールド化しているNTはどうすればいいのか。麗しい事例として時折新聞などで紹介されるコミュニティ再生への試みがみられるが、それで本当にオールド化しているNTの再生となりうるだろうか。そこにどのようなシナリオが存在するのだろうか。

改めて本稿のテーマに即して言えば、大都市と言う「森」への人口集中という状況に対応するべく「木」として位置づけられたNTが、主に大都市近郊に作られ「森」を支えてきたが、時が経って「木」が弱ってきた段階で、その「木」の枝ぶりや虫食いを対処療法的に対応しているのが今の状況とは言えないだろうか。「森」との関係はどうなったのだろうか。NTは建築と同義ではないが、居住等の空間を創造している、と言う意味で「建築している」。その意味で、私はここにも、「建築と社会を考える」構図を見るのである。

最近「オールド・ニュータウンの再生への取り組み状況と今後のあり方に関する研究」（2019，2020年度）に取り組む機会があった。私は研究主査を務め、２か年調査のまとめとして、オールド化している主要NTの再生、暮らしの活性化に向けて、NT計画を推進してきた時代とは違った新たな、力強いベクトルを作り出す必要があると提言している。即ち、「木」（オールド化しているNT）と「森」（大都市圏）を近未来のパラダイムを視野に入れつつ、両者を関係づけるグランドデザインが必要と訴え、それを６つの《オールド・ニュータウンの再生グランドデザイン》として纏めている。

詳細は別途報告書[注2]などをご確認いただければ嬉しい。ここでは項目だけを列記し、考えのさわりを伝えたい。

《再生グランドデザインⅠ》

オールド・ニュータウンを近未来の日本が抱える暮らしの課題に挑戦し、新しい仕組みを実装していくモデル都市＜新・ニュータウン＞として、広域レベル（国、府県、市町村レベル）で明確に位置づける。

《再生グランドデザインⅡ》

オールド・ニュータウンと大都市圏母都市との間に、新しい補完関係を形成する。

《再生グランドデザインⅢ》

入居先として選択されるように、＜新・ニュータウン像＞を創造する。オールド化しているニュータウン自体の魅力化、さらにニュータウン周辺エリア・後背エリアを視野に新しい生活圏像創造をめざす。

《再生グランドデザインⅣ》

オールド・ニュータウンの暮らし活性化への活動エネルギーとして、＜内部からの視点＞と＜外部からの視点＞の両面から考える。

《再生グランドデザインⅤ》

＜内部からの視点＞や＜外部からの視点＞の持続的な醸成や導入においては、住民まちづくり組織のまとまり、ニュータウン事業に関わってきた事業主体の役割、そしてこれからも行政の役割が重要である。

《再生グランドデザインⅥ》

オールド・ニュータウン再生に向けて、より明確に時間軸を視野に入れる。

ある郊外ニュータウンの様子（撮影：三好庸隆）

■おわりに

アナロジーとして「木を見て森を見ず」というフレーズを掲げ、本稿を進めてきた。先に「木」と「森」の例も挙げてみた。改めて考えるに、多くの識者が言う時代の変わり目である現代社会は「“木を見て森を見ず”社会」であるのかもしれない。と言うか、根本を問いづらい社会、「森を見づらい社会」なのかもしれない。それは何故だろうか。高度に重層化し複雑化した管理社会、仕事が細分化されているサラリーマン社会、リーダー不在（「木」を見て、「森」を語れるリーダーの不在）、短期成果が求められ「森」を語る余裕がない（「森」を語っても評価されない）現代資本主義社会、フェイクニュースが平然と流れ「森」が厚いベールに包まれるデジタル社会、などが底辺に横たわるように私には思える。そのような意味で、先に挙げた「木」と「森」の例は、根で同じ問題構造を抱えているのかもしれない。

デジタル化、AI社会がさらに進めば、「木」を知り「森」と接続させられる人材、「木」と「森」との間を縦横に行き来できる思考が必要とされるであろう。

私は生活環境学科で、「建築デザインコース」と「まちづくりコース」の学生を指導する立場にあるが、上記のように考えると、我田引水のそしりを免れないかもしれないが、これからますます必要とされるであろう「建築（木）」と「社会（森）」を具体的に考えることができ、軽やかに「木」と「森」を思考できる人材を育成している、とも言えるかもしれない。そう自分に“大きな物語”をミッションとして与え、もう暫く「建築と社会」を考えつつ創造的、実践的に取り組めればと思っている。

（みよし　つねたか）

注

1．三好庸隆著『＜まちづくり＞への新発想ーその可能性と18の視点』（建築資料研究社、1998年）など。

2．２か年の報告書の全データは「武庫川女子大学三好庸隆研究室」HPに掲載。